

文化高知 43

文化を創る力を

山崎 和孝

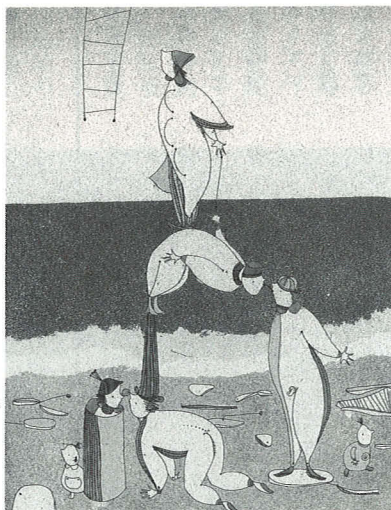
わが高知が幕末から明治にかけて多くの人材を輩出し、近代日本の方向付けに大きく貢献したことは周知の通りです。その昔、鹿持雅澄が万葉集古義を著したのも高知にそれだけの文化的背景があったからですし、この高い文化的素地が万次郎のみやげ話を回天の偉業に繋げたと言えましよう。

つた。その経済力が朱子学の書籍を土佐に集めさせ、後に京都で垂加神道Ⅱ 闇齋学派の祖となる山崎闇齋が学びに来るほどの南学を勃興させた。」

昔の栄華いま何処。県民所得は沖繩

しかるに今の高知はどうでしょう。学齢期の子女を持つ人々は高知への転勤を敬遠する由、理由は教育レベルの低さだそうです。何故こんな事になったのか？ ここで参考になるのは、高知会議88のパネラーとして来高された山本七平氏の次のような発言です。

「土佐は有利な産物を数多く持っていた。かつお節は調味料として、樟脳は防腐剤として、珊瑚は装身具として土佐に独占的な利益をもたらし、主食の米は二期作で豊富、なたね油も綿も塩もとれ、紙も炭も鯨油も大産地。江戸時代の土佐は日本一の富裕藩であ



寓意 横田 稔

と最下位を争い、教育振るわず、動かす政治家なく、独り気を吐くは漫画家のみ。詰まるところ、経済力がなければ文化も栄えず、教育水準が低いから人物も育たないという事ではないでしょうか。

三本の本四架橋完成の暁には、四国は島でなく半島になります。半島経済は一般に、付け根が繁栄し突端が疲弊するそうですが、このまま進むと、高知はその疲弊する突端に位置することになります。これを避ける道はただ一つ、高知を半島の先にしなないで扇の要にすることです。太平洋をめぐる各国からの貨物船を全部引き受け、荷捌きや加工を行い、三つの橋を通って西日本一帯に配送する一方、瀬戸内沿岸で生産される大型貨物はここに集めて輸出する—こうなれば正に扇の要です。水路が狭く、流れが早く、霧が深くて衝突の絶えない瀬戸内海に橋が三本も架かれれば、大型船は航行の楽な高知新港に集まります。大型バスと新鋭荷揚げ設備、一次加工と貯蔵のための広い後背地を用意すれば、これは決して実現不可能な夢物語ではありません。こうして経済的浮揚に成功すれば、文教の地土佐の伝統も蘇ります。新港の背後地を経済活性化の切札にして、文化の香り高い活気ある高知を創ろうではありませんか。

(川村時計店社長)

娘のカルチャーショック

太田 素子

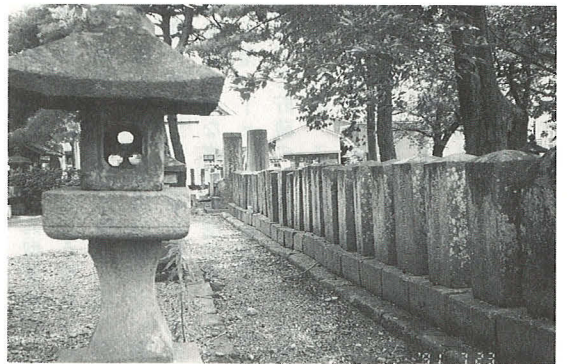
夫の郷里、福島県会津若松市に転居して早いもので一年近くなる。一年間、高知市朝倉に住んでいたが、離れてみて改めて「第二の故郷」高知の風土や文化に思いを馳せるよくなることが幾度もあった。

そうした機会の最初は、娘のカルチャーショックだった。彼女は高知で生まれ、小学校一年の一学期まで高知で過ごした。一学期に学校でもらった作文集『やまもも』がとても気に入って、転校直後『福島の子ども』という作文集が渡されたときも、喜び勇んで読みはじめたのだが、はじめの三つ位読んで「嫌いだ」と投げ出してしまったのである。おどろいて私も読んで見た。そして、子どもは新しい環境に慣れるのは早いというけれど、確かに早いのかも知れないが子どもなりに大変なのかも知

れないと、密かに覚悟したものである。

娘は『やまもも』の作品に流れるはじけるような明るさが好きだったのではないかと思う。中には家庭崩壊を小さな眼で見つめる作品もずいぶんあった。二人でシユンとして読んだこともしばしばだった。それでも、選者のコメントの暖かさに魅せられ、また不幸を率直に綴るまっすぐな眼（受け止める教師の存在が大きいのだろうか）は、しなやかだった。

いつぼう、娘がついて行けなかった『福島の子ども』の作文というのは、粘り強い努力をテーマにした作品だったのである。例えば、雪深い山道を一時間かかってくじけそうになりながらもやっと通学したこと、運動会で転んで悲しかったけれども最後まで走り通したこと……。初めは



戊辰戦争西軍墓地、土佐49名の墓標あり(会津若松市大町)

ちよつと徳目臭いかなと感じた私も、実はこれが北国の人の強さ、北国の文化の底力とつながっているのだろうとすぐ考え直した。自然相手の苦労では怒っても始まらない。また、「貧しさをわけあう」ために、東北は家族の規模も大きかったし、共同体の絆も熱く強いものがあつたといわれる。人間関係でも我慢強くないればやって行けなかったのではないか。

思い起こす機会は幾度かあつた。例えば、先日、性別役割分担見直しをテーマに、福島ではじめて講演の機会を与えられた。女性の感想や意見は高知とそれほど変わらないが、男性はかなり違いそうだとか、また高知も会津も歴史に深い関心を持つ土地だが、明治維新のくぐり方が正反対。それはどちらの土地にもとても深い刻印を押しているようだ等々。いずれにしても、東京で生まれ育った私が、高知の着い風景と、北国のこんこんと降り続く雪景色を、その土地の文化と共に深く体験できるのはとても幸せだと思っている。

ほかにも異文化体験の中で高知を

(郡山女子大学講師)

— 安芸郡田野町 —

明日に向かって

いきいきプラチナウーマン 安岡 恵

清流奈半利川を命の水とし、三八〇人の人々の住む県下で二番目に小さな町、それが田野町です。

町のほぼ中央には、かつては魚梁瀬杉の丸太を山と積んだ貯木場跡地があります。森林鉄道物語の栄光も衰退も今は夢の跡となり、孔雀草の花咲く広大な地に、田野町民は町の存亡をかけて未来をえがきました。

その結果企業誘致が実現し、二五〇人の女性の働く場も確保され、中央道路の建設は動脈として町の流れを変えようとしています。しかし、もともとが財源の乏しい過疎の町のこと、住民の町おこしへの英知と努力はこれからが本命です。

こういった町の現況を支える町民パワーの中には、婦人学級があります。発足したのは昭和三十五年、時代と共に変容してきましたが、特に受け身の学習から、求めて学ぶ自主運営に進んだこの十年來は、そのテーマも社会の動き、婦人問題、地域の課題へと広がり、それを行動に移すボランティア活動が最近の主軸となっています。

田野町の国道は車で走ればわずか五分、その窓外に四季の花を咲かせているのが婦人学級です。これは「学習わが町を見直そうシリーズ」の一環から発展したのですが、実情を

知るための国道の清掃作業から行政と住民の役割を学び、そこから自発的な行動が生まれ、それを見た国道事務所が、花壇を設置してこれに応えた。というその経過に、住民が町づくりに参加していくよりよい姿をみるように思います。



国道の花作業

さて花いっぱいと言っても、四季の花を絶やさないということは容易ではありません。しかし手抜きのできない花作業を続けるうち、花に会い人に出会う喜びや、社会とのつながりが自分の後半の人生に色彩のあ

る開花となっていくことに、女性たちは今気付き始めています。年齢は、白秋の季節にいる学級生にとつては活動を通して老後を考え、男女共立社会への扉をたたき、生活者としての視点を大事にしながら、人生のもうひとつの指定席を婦人学級に求めているのです。

学習は、「出掛けて学ぼうシリーズ」が結構多く、活性化の先進地を訪ね自然や文化にふれ、講演に感動し外から田野町を再発見し好評です。反面郷土への想いも大切に、花作業の日を毎月二十三日と決めたのは、維新の夜明けを駆けつけた草莽、二十三烈士にちなんだものです。「男子の本懐」で知られる浜口雄幸元総理大臣の簡素な旧邸は、田野町文化財の一つですが、実家水口家のある高知市五台山から多くの人が「ハウス園芸祭り」に参加してくださるようになり、田野町との交流も始まるようになってきました。

私達の学級は、創造型というよりは日常型の地味な裏方ですが、夏祭りには踊って踊って装い朱夏^{あか}の年齢に変身することも知っています。次代への継ぎ手の役割を忘れず、いつまでもプラチナウーマンを目指す婦人学級でありたいものです。

(田野町婦人学級級長)

ハコには中味の充実を

猪野 睦

高知はものを大切に生きてきていないのではない。淡白な県民性というしまえばそれまでであるが、その淡白性ゆえに多くの文化財を失ってきているのではないかといつも気になってきた。文化財とは行政が指定する建物や史跡などに限ったものではない。ふだん見なれている風景にしても自然にしても、それがどれだけ文化的な価値をもつものであるかあまり気付かずしてきた。さいきん四万十川が脚光を浴びるなかで、身近なものへの文化的理解も深まってきたといっている。

文化とはひと口にいってしまえば人の住む条件、住むにふさわしい空間として人の集まってこられる条件を充たすものといっている。それにしても高知はもつと身近な価値の存在、そしてそれを生かしていくことを考えていいのではないか。さきごろある集落の公民館へたち

寄ったときのことだった。その図書室にある本が目をついた。そこは戦後まもなく建てられた旧町村の木造公民館だったが、町村合併で集落の公民館として残されてきているものだった。したがってその棚にある本も戦後十年位の間に旧町村が町民のために買いこんできているものだった。三、四十年前に購入したものであるため背も赤茶けてはいたが、いまだではもう珍しくなっている本も多かった。

それらの本からは当時の旧町村の図書担当者の文化性、個性、村に戦後文化を根づかせていく意気込みのようなものの伝ってくるものがあつた。

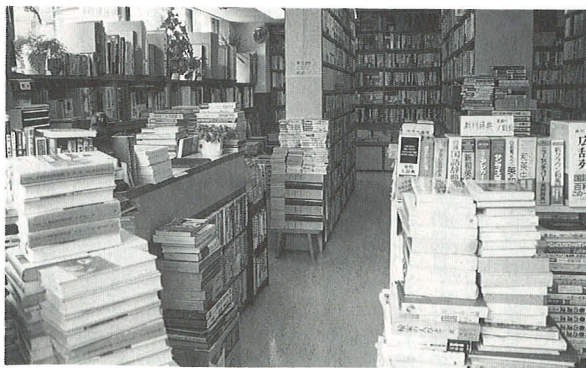
いまとなつては入手不能といつていい本も随分とあつた。いまだの位の人が利用しているのだろう。おそらく旧町村単位の集落公民館となつているため新刊購入予算もままなら

ず、棚を古い本で埋めつくしているように見えた。だがこのことが結果として、戦後の本を残すこと、保全することになってきているのだ。

ここ三十年ばかりの間に市町村合併が進み、大型公民館とそれに併設する図書館がこの町村にも建つた。新しい図書館は空調が効き閲覧室は快適となつた。そして新館にふさわしく棚を埋める図書も各種全集、ベストセラーのもの、事典類など新刊もとなつた。どうみても戦後から購入してきた本のたぐいはない。すべてが新刊に買い換えられ書店を移したといつてもいいものになつているのが、ぼくの眼に映るほとんどの図書館だった。

いまから十年ばかり前になろうかある町村の図書館から本を処分するので必要とあればとりにこいという葉書をもつた。それもこれまでの木造図書館を解体して、四階建て空調公民館の一室を図書館にあてていた。本の処分は新館図書室を新しい全集などの新刊できれいに埋めるため、古い本をゴミとして処理していくためだった。

葉書をもらつて指定の日にかけた。そこには赤茶けてはいたが、戦後文化の高揚を伝える翻訳もの、小説、社会科学ものが処理本として並べられていた。当時のその町村の図



古書を蘇らせる(高知市内の古書店で)

る側にあれば、それらの本は古書店を通じて必要な人に巡回していくことになるのと思つたりした。

県下の多くの町村で、あるいはその他の図書館でこのようなかたちでゴミになっていく本はどれだけのものか。その文化的損失はどの位のものか。

戦後二十年ばかりの間の本も、いまでは貴重なものになってきている。四十年をすぎて古典扱いされているものもある。時代の流れ、本の洪水のなかでの淘汰ということも解る。だがそのなかで必要な本の消え方も

すさまじい。必要な本がゴミとして処理されていくものなかに多い。

数年前、ある実業高校で大正時代からのかなりの図書を処分したとあつた。戦前からの貴重なその実業分野の図書だった。担当者が変われば本は捨てられるのである。

こういうなかでいつも考えるのは、どこかの市町村で古書資料館を建て、そこにゴミにされていく本のなかから系統的な必要図書を集め、集中保全管理する位の文化事業をやってみるところはないだろうかということだ

議するといふ姿勢が必要なのである。

しかし、国や電力会社は、原発が機械であり、設計ミスや壊れる可能性があるという基本的な認識を持つとせず、「原発は安全である」と信じ込み、原発がいかに安全かを喧伝している。この批判精神が組織

環境問題を考える

内部で全く機能していない点が、日本の原発の大きな問題なのである。

また一方で、百パーセント安全なら、原発を容認して良いかという問題がある。原発は、利便性追求のため大量のエネルギーを消費するという、我々の生活様式を象徴

書関係者の文化吸収のほてりのようなものが、それらの本にはあつた。戦後期、町村文化を引きあげるための図書関係者の情熱を、ここでこれらの本とともに捨て去つていいのかわからない。一瞬、町の戦後文化の一時期を見た思いだつた。

結局、わが家のスペースも考え、目ぼしい数冊をもらつて受領印をつけて帰ってきたが、やはり惜しい本が多く、これがゴミになつていくのかと思うと腹だたしかつた。こういう場合、やめて古書店へ連絡して引き取ってもらおうという才覚が処分す

についての提示が多く新鮮だった。文化をつくりだしていくのは自由な人ということに力点をおいていた。このなかにも図書館を含む施設を生かしていくのは人材であることが強調されていた。

これからの高知の文化は、文化伝統に根ざし、いまじわじわとしのびよつていく文部省的・教育委員会的発想を大きく越えた人材を育てあげていくことにあるのではないか。ものとも人に人を大切にしていくなことはあるまいか。

(詩人・高知ペンクラブ事務局長)

のセミナーにおいても、農業や酸性雨による土壌汚染、ゴミの大量投棄による汚染など、環境の世界的規模での破壊に対して関心を持つことの重要性が強調されてきた。これらは全て我々が豊かさや利便性を追求した結果の産物であり、まさに生活様式の鏡としてこれら汚染があるのである。

環境問題はライフスタイルの問題であり、生活についての考え方を要する以外に解決の道はない。日本人は有史以来、自然の恵みの中で、自然と共に生きてきた。我々は、自然のうつろいに大きな関心を寄せ、自然を畏敬し、自然に対する豊かな感性を培ってきたのである。このことの価値をいまい一度確認してみる必要があるのではなからうか。

海鳴り (四)

堀内 豊



これまで詳しく説明したように、渭之浜・福島・宇佐各浦の漁民たちの貧困の原因は、おもに時化で出漁できないとか、海難事故、あるいは不漁、米価の高騰などにある。

それで、銭がないから、燃料の薪も買えない家かなりあった。

たとえば、薪泥棒のはなしを〔青龍寺要録〕でみると、近くの浦々から龍村に、船で渡って来て、青龍寺の所有する五ヶ所の山から、薪を盗んで逃げる者がいて、実に閉口する……というところが誌されている。

……というように、薪を買えない、米を買いたくても銭がない、網を繕うにも銭がない、と、ないないづくしの浦人から、十衛門は庄屋であるがゆえに泣きつかれたろう。

すると十衛門は、自分で出来るかざりのことをしてやろう………と思つて、分一役所に向いて浦役人から、城米・城銀を一時借用の名目で

借り、そのまま渭之浜の住民に貸し与えた行為が、その後もたび重なり、〔銀三貫九百三十五匁〕にふくれあがつたものと推測する。

そこで一つの試みとして、事件前後における四郎兵衛と十衛門の心境に、一歩も二歩も踏みこんで、ふたりの想いを綴ってみることにする。

十衛門の独白………

〔新浦〕の年貢減免の期限が切れ、いまも……。今までも、しんどい暮らしをしてきた浦の連中に、また重い荷が背負わされる。

これまで、せっぱつまつた浦の人たちに、福島御分一役所から、米や銭を借って貸してやつたが、そういつまでもこんなことを続けることはできぬ。

思えば、なにかも渭之浜のためにしたことだが、これから年貢を納める段になると、先さきが真つ暗に

なる………なまじ庄屋になるんじやなかつた。気苦労だけでも大変だ。

この辺りの漁師はみんな〔お触れ書〕にしばられて、立ちも這いもできんようにさせられたが、それでも生きていかなないといけないから、辛抱をして沖へ出るが、そうそういつも大漁にありつけるわけじゃない、出漁をせん日は、陸で仕事をせよというが、こんなちっぽけな痩せた土地では、麦も野菜も作れはしない。せいぜい桑の木ぐらゐのものか………しかし、蚕を飼うにも、道具を買う銭はなし、肝心の蚕の種子を売ってくれるところはめつたに無いし、困つたものよ………

〔寛永二十年（一六四三）野中兼山は〔本山掟〕で「蚕かい候事存候者は、屋敷廻り桑の木を並木に植へ置き、蚕かい可申」と、養蚕を奨励したが………

このままでは、極楽どころか、地獄で閻魔の顔を見ることになる。それも元はといえば、この辺りの浦役人に指図して、二進も三進もいかんようにした藩のお偉方や………そうにきまつている。

もう四郎兵衛の顔は見とうない。あいつは宇佐の出世頭で、いまでは兼山に見込まれて、漁師を生かすも殺すもできる、西浦の総奉行になつたというが、どうして貧乏な漁師た

日後に、四郎兵衛は、井尻村の薪山を半分、渭之浜へ分け与えるように尽力している。

このことは、四郎兵衛が、十衛門の所業をあわれみ、渭之浜の犠牲になつた彼の悲命を弔う、せめてもの手向だつたかもしれない。

その年から九年経つ延宝三年（一六七五）………

四郎兵衛は、不埒な下僚の汚職、それも御城米・御城銀を流用した責を負つて、ふるさとの宇佐浦で逼塞することになる。

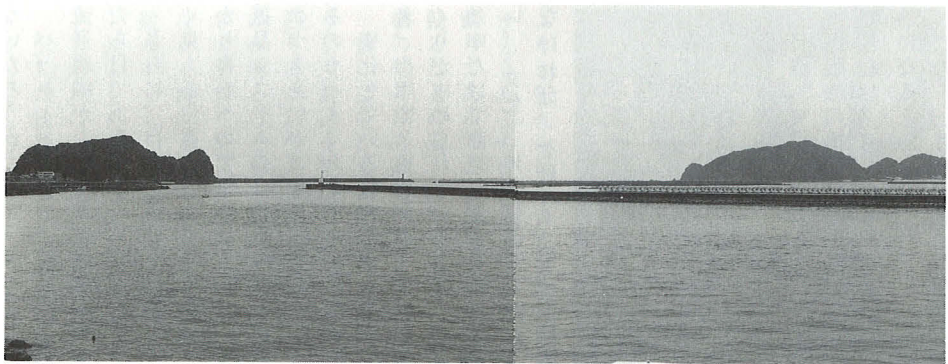
憂愁の日々をすごす四郎兵衛は、たまに渭之浜のほとりを逍遙しただらう。そうした折りに彼は、いかような感慨で十衛門を偲んだらうか。さもあらばあれ………

こんにち四郎兵衛の墓碑が、苔むして残つていても、十衛門が土葬にされた場所は、どこであるかさっぱりわからない。

事件の真相も、三百三十年余の茫茫たる歲月の彼方にかくされて………

一九九〇年十一月中旬。

久しぶりに帰郷した私の眼のまえに、宇佐湾がひろがっている。青い波が崩れて、しらく飛沫が騰る………。港の様子は、すっかり変つた。漁法も、なにもかもが。



福島浜から萩岬（写真左手）と龍岬（写真右手）を望む

だが、変らぬものは、十衛門・四郎兵衛が、耳をすまして聴いた海鳴りの音だけである。

ちを見殺しにする気か………あいつの料見は実にわからん。四郎兵衛は、子供の時分からこの辺のことは手に取るように分っている筈や。それに、宇佐浦の奉行をしたことのある男が、人の難儀をみて、見ぬふりをするのはまことにけしからん。それでも男か………

十衛門に詰られる四郎兵衛は、眉をひそめて

〔十衛門、おまえもそうか、だれも俺の心中なぞわかりはすまい………〕と、つぶやく幻像が、古い幔幕に映しだされるが………

さて、そのころの四郎兵衛は、それこそ寝食を忘れて〔御国大事〕とばかりに、藩に身命をささげていたから、各浦の動静については、かなりな事が起こらない限り、分一役所の浦役人に委せていたから、いくら郷里のこととはいへ、充分の目配りはできかねた筈だ。

だが、渭之浜・庄屋のことは、ある意味で四郎兵衛の協力者のことでもあるし、それに、自身と同様に萩谷川の水を浴び、魚釣りをした、生粋の宇佐のおとこがしたことだともうと、言い尽くし難いあわれみの情がわいてくる………

十衛門は、困窮にうち拉がれた渭之浜のにんげんを救おうとして、この儂になり代わつて、やむにやまれ

ぬ気持ちで、事件をひき起こしたやもしれぬ。

ならば、念仏唱えて、十衛門の跡始末はこの儂がきちんとつけてやろうぞ………

と、西方の空から、四郎兵衛の苦衷の声が、いましがた私の書齋の窓に聞こえてくるようだ………

さて、再び〔萬覚並状之跡書共〕の行間を探ってみよう。

事件のあと、急遽、高知から宮地治右衛門が渭之浜へ馳せ参じ、検死に立ち会つた一時間後に、十衛門親子を土葬にしている。

なぜこうも早く、埋葬しないと聞かなかつたのか。

かりに福島浦分一役人が、『死体が腐敗するから、一刻も早く………』と、処置を急いだとしても、時は残寒の頃合いである。腐敗するには、まだ余裕がある。

いやしくも〔庄屋〕の死である。手傷をうけた娘、縁者たちは、身内だけでも略式の葬儀を営んだうえで………と、思つたらうに、そうしたことはいっさい無視して、早ばやと事態を処理している。じつに訝しい。

近世の歴史学に造詣が深い故・横川末吉氏は、その編著〔土佐市史〕で、十衛門のことを「庄屋発狂自宅

（高知県職業安定審議会委員） 完

どうなる？地方出版

—作る側、売る側の連携を—

細迫節夫



コミック、雑誌、ビデオ、CD—
県下の書店を回って思うことは、確
実に「本屋」のイメージが変化して
いるということだ。何年もしないう
ちに、本はそうした「マーケット」
で買うということになり、昔ながら
の「本屋」をさがすこと自体がむづ
かしくなるかもしれない。

「流れ」を読むのに敏感な時代で
ある。流れを読み、乗るのは経済の
鉄則でもあるから、この傾向は弱
まらないと思う。

以前、文房具も営む田舎の小さな
本屋を初めて訪ねた時のことだ。い
かにもおぼちゃんらしいおぼちゃん
(う)が出てきた。私は、気が緩み、
まるで以前からの知り合いの如く、
本を置かせてもらえませんかね、と
声をかけた。

「そういう本は、坪効率が悪いか
らね」
私は一瞬、時の流れを忘れた。我
に返り、そうですかと言って店を出
たもののショックだった。まさか、
こんな所で(差別的表現でごめんな
さい)経済学を学ぶとは、ここまで
効率主義が浸透しているとは思
った。

坪効率—坪当たり一日に××円
売り上げないと店が維持できないと
いうメド(平均目標値)が各店々に
あるのだ。

POSだ、VANだ、CD-ROM
Mだとコンピュータ化がすすみ、
スーパリーの如く売れ筋商品がつかま
れ、売れない筋商品は自然にはじき
とばされる時代が近い。

まっ先の対象が、地方出版物であ
る。私たちがお手伝いした自費出版
の本や自社制作の本がだもろん他
社も含めて、ホコリをかぶつたり、
とても手のとどかない棚の上にあつ
たり、人目につくはずのない箱の中
にしまわれている姿は、わかつては
いてもやるせない。

効率主義が浸透していく中で、一
体私たちがどのような地域出版物はど
うなっていくのか、まず書店側がどう
見ているのが気になった。

A書店II郷土出版物の売上げは二
三%を占めるにすぎないとしながら
も、しっかりと郷土コーナーを設
置している。

B書店II地元の本は確かに効率が悪
い。しかし例えば法律や経済ものの
回転率は悪いが、充分な役割は果た
している。特に、夏休みや正月はよ
く売れますよ、と言う。

ついでに、ある書店主が言ってい
た。「高知でない売ってない」と
いうのは充分商売のスローガンにな
る、と。そうだと、テレビで見れな
い川崎球場」というコピーもあつた
つけ。都合のいい引用ばかりだった

かもしれない。だが、こうした過疎
を逆手にとった発想が必要なのでは
ないだろうか。

パッケージが悪い、値段が高い。
流通組織がない。地域出版物は弱点
だらけである。

さらに、自分(自社)の本を、よ
く見える位置に、たくさん置けば、
かり書店への要求を拡大していくと、
返品システムのはつきりしない本と
のつきあいご免こうむりたいとな
るのも、よくわかるというものだ。

変化している時代だからこそ、著
者、出版側と書店側の、よい関係づ
くりが求められていると思う。「坪
効率だけで商売を考えるのはもう古
い。文化」「地元密着」を頭に入れ
なければ、と思う。そこで提案。

「図書目録」の活用である。

いくら書店に「郷土コーナー」を
つくってもらっても、年間三〜四〇
〇冊は出ているであろう本を展示せ
よというのは無理がある。その時々
の新聞は書店で見、一年間の情報は
「目録」で得る。これで、書店で県
内出版物の情報を県内外の人に提供
できるし、何もかも置かずすむこ
とになると思う。

この十一月には、出版懇話会、書
店組合共催でフェアが行われる。
何かが一歩進めば、と思う。
(南の風社代表)

土佐の芸能10選 ⑧

土佐の花取踊り

—盆の芸能から秋の芸能—

高木 啓夫

土佐の祭りの風物は酒と皿鉢と花
取踊りである。その花取踊りは太刀
踊りと名をかねて県下全域に分布す
る。その観点からはまさに土佐を代
表する民俗芸能である。

人々を土佐の国へと招き寄せる観
光用ポスターには紙吹雪の散るなか
にきらめく白刃をもって太刀踊りと
称して、目を楽しませているが、こ
うした場面は県の中央部の、ごく一
部の花取踊りにみられるにすぎない。
従って花取踊りをもって太刀踊りと
呼称する慣わしも県中央部において
みられるものである。そして花取踊
りをもって太刀踊りと呼称されるよ
うになったのは、大正から昭和にか
けての富国強兵の思潮が少なからず
影響を与えていることは否めない。

花取踊りは、津野氏が吉良氏を攻
めた時に祭りであったことにことよ
せて踊り攻めたとか、幡多の敷地氏
が花取城を攻めるときに踊り子に扮

して攻めたとか伝承されているが、
敵城攻略に踊りをもって策し、かつ
その時期が盆の季節であったこと、
太刀を用いての雄壮さをもっていた
ことは注目されなければならぬ。

花取踊りはその演目の一つでもあつ
た。



花取踊り 須崎市大谷

た。このことは太鼓のほかに鉦を楽
器としていたこと、「ナムオミド」
といった念仏を囃しことばにしてい
ることも知れる。そして定位置で
両足を前後左右に動かす単調な所作
などは念仏系のものであつて、旋回
を基調とする神道系のものではない。

花取踊りは元来念仏踊りだとい
う私見は、今では理解をいただき定着
した感であるが、県下の花取踊りを
限なく調査した揚句に、この説を文
章化した十数年前には、ひどく抗議
や叱りの電話や手紙をいただいたも
のである。秋祭りに奉納される神事
芸能を念仏踊りとは何事かと。

念仏踊りというものは、祖霊や亡
者の供養のみに踊られるものではな
い。雨乞いや疫病流行のときなどに
も祈願の踊りとしても踊られる。

ところが、排仏毀釈の激しかった
近代土佐では寺堂は廃たれて神社が
優勢であった。祈願のためには神社
の庭で踊る。

神社の夏祭りは豊作豊漁の祈願祭
ではない。六月末の夏越輪抜け祭で
も知れるように疫病防けの祈願祭が
本質にある。この疫病防けという共
通した目的を果たすために、念仏踊
りは神社の庭でも踊られる。念仏を
神の前で唱え踊るなどは非条理だと
いう、神道家や仏家の説を持ち出す
ほどに庶民は理論家ではない。理論



花取踊り 窪川町川奥

よりも伝えられてきた祈願の形態が
優先されるのである。やがて、盆の
踊りであることが忘れられ、神社で
踊ることに親しみを覚えるにつれて、
秋の祭りにも踊られるようになる。

盆の芸能から秋祭りの芸能へ。そ
うした経過を辿ったがために、花取
踊りは多彩である。今もって、盆に
のみ踊るところもある。太刀を用い
ずに団扇、扇、六尺棒、ザイ、手拭
などで踊るところもある。神社の拝
殿の中でも、寺堂の庭でも踊る。武
士装束もあれば浴衣でも踊る。烏帽
子もあれば、山鳥の毛を冠る。

里人の創造への意欲が、花取踊り
を多彩にしている。これが民俗芸能
というものである。
(高知県立高知工業高等学校教諭)

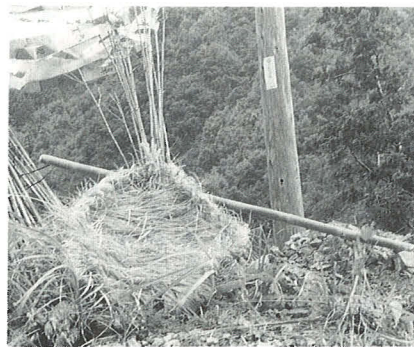
虫送り

坂本正夫

稲作に害をもたらす虫を追い払う儀式である虫送りは、雨乞いや風祭りと同じく重要な共同祈願であった。この虫送りを土佐では虫まつり、虫供養、火祭りなどと呼び、旧暦五月二〇日や二八日に行う所が多かったが、六月一日や半夏生（夏至から十一日目に当たる日）、あるいは田植終了直後の田の神祭りと一緒に行う所もあった。

神官や僧侶を招いて神社やお堂で虫害退散の御祈禱をしたのち、大草履や幟などを担ぎ鉦や太鼓を叩き法螺貝を吹き鳴らし、「斉藤別当実盛、稲の虫ア西へ行つた」などと大声で叫びながら、地区内の畦道を歩く所が多かった。虫を送るのは集落、地区の上手から下手へ、あるいは東から西へ順次受け継がれて行く所が多く、村境では川、海、山などへ草履や幟を放流したり放置したりしていた。

安芸市上尾川の虫送りは旧暦五月二〇日に行われる。菜刀（包丁）を持つ者を先頭に「五穀豊穡、悪魔退散」と墨書した幟を持つ者や、大草履の片方だけを担ぐ者などが行列を作り、鉦、太鼓を叩き、「斉藤別当サーナボリ、稲の虫アひしゃいだ、大豆の虫もひしゃいだ」と大声で唱えながら、集落の奥の端から川下の下尾川との村境まで虫を送っていた。



村境に放置された大草履と幟
安芸市上尾川

土佐郡土佐町南川地区では半夏生の日に、東の端の程野から中村、川井、川奈呂へと順次ムラ送りをしていた。寺からもらってきた祈禱札を吊るした笹竹、草履の片方、虫を入れた竹筒などを持ち、太鼓を打ち鳴らしながら、「斉藤別当実盛、稲の虫ア西へ行けよ」と囃しながらムラの西端まで送っていた。

高岡郡仁淀村大植では五月二八日の正午ごろ、区長と組長、それに各戸から集めた「南無阿弥陀仏」と墨書した障子紙をしばりつけた、長さ三米ぐらいの葉のついた竹を持つ子どもたちが観音堂に集まる。村中の害虫を追い払う御祈禱が終わると、区長が猟銃を三発放つ。ついで子どもたちは幟を担ぎ、鉦の音に合わせてナンマイダー、ナンマイダーと唱えながらムラ境まで行き幟を川へ投



虫送りのために作られた大草履
安芸市上尾川

香美郡物部村五王堂では、五月二〇日に区長と何人かの総代が観音堂に集まって虫害除けの祈禱をし、大きなアシナカをカタゴ（半足）作って村境に吊っていた。集落内の各家へは法印さんに梵字を書いてもらったビワの葉が配られるが、これは各家の田畑へ立てられていた。特別に虫害のある年には夜間に鉦、太鼓を打ち鳴らしながら、「斉藤別当サーナボリ、稲の虫を送つた」と唱えながら松明をつけてムラ境まで虫送りをしていった。

このような火送りによる害虫駆除は、大正期から昭和初期ごろまでは、まだ県下のあちこちでみられた。

（高知県立小津高等学校教諭）

民権のうねりの中に登場し、今日に生き続ける一つの言葉と一つの施設を取り上げよう。どちらも高知中学校が舞台であり、主演は植木枝盛である。

一八八六（明治一九）年七月五日、高知中学と高知師範の新築校舎が追手筋に完成し、盛んな開校式が行われた。出席した植木県議員は祝辞の中で、

「本校の改築工事が斯くも立派に出来上がったのは賀すべきだが、之に要した金は天より降つたものでもなく、地より湧いたものでもない。悉くこれ県民の汗や膏の塊だから、本校の職員生徒は深く此の点に留意して、各々教育の成果をあげて以て県民に酬ゆる所がなければならぬ。」と語り、生徒をはじめ参会者に深い感銘を与えた。その後同校の校名はしばしば変更されたが、一九二二年四月一日からの高知城東中学校、一九五〇年一月一日からの高知追手前高等学校が名門として広く知られている。

さきの開校式に生徒として出席し、後に愛知医科大学長と熊本医科大学長を兼任していた佐川出身の山崎正董は、一九二九年六月二一日母校で行った講演の中で開校式を回顧しながら、

（植木の）この一言は四〇（正確

には四三）年後の今もまざまざと私の脳裏に強く印象されておまして、私は名古屋にあつた時も又熊本に於ても、医科大学の学生に常に此の意味の言を以て訓諭しておます。本校の生徒諸君もどうか平素此の覚悟と決心とを以て学事を

生き続ける自由民権

高知中学校と植木枝盛

外崎光広

励み修養に努めて、立派な人物となり、邦家のためにお役に立つて下さるやう切望いたします（山崎博士の演説と文章）。と語った。植木のこの祝辞はすでに百五年前のことなのだが、今日に生き続けているし、今後も消えることはないだろう。



高知丸の内高等学校

生き続ける施設は高知中学校女子部である。明治前期には高知中学も立志学舎も共立学校も女子を入学させなかつたが、一八七八年に高知女子師範学校が設置されたから、教師になる意思のない者もここで中等教育を受けていた。ところがその後規

則改正があつて、卒業生は一〇年間教師に服務することが義務づけられたため、卒業直前の退学者が続出した。

このような状況を見た植木は、一八八七年二月一八日の県会本会議に高等女学校設立の動議を提出したところ、これが可決され、県会が高等

女学校設立の建議を県知事に提出した。植木の動議も県会の建議も独立の高等女学校の設立だったが、同年九月三〇日高知中学校女子部が開校になった。独立の高等女学校が値切られたのだから、女子の中学校入学が実現したことは、県内における女子教育の画期的前進であった。それから七年後に独立の高知県高等女学校が発展、一九二六年四月に高知第一高等女学校と改称し、その名門を誇り続けている。

敗戦に伴う学制改革に伴い、一九四九年九月から高知丸の内高等学校として隆盛を続けている。生き続ける自由民権の一つである。

もっとも教育の自由を軸に百四年の校史を辿るならば発展・隆盛の一路ではなかつた。自由民権運動の最高の理論家と評される植木は、開校した女子部が間もなく反動的教育方針を採つたため、県会本会議においてこれを糾弾したのであるが、十五年戦争中のそれは言語に絶するものだったことは公知の事実である。敗戦後ようやく教育の自由が道が開かれたかに見えたものの、サンフランシスコ条約締結の頃から教育に対する権力支配が一路加重されている今日、植木の自由教育論を回顧することの必要を痛感することしきりである。

（高知短期大学名誉教授）

みそぎの季節

依光貫之

六月三十日、「輪ぬけさま」の二ユースを見て、今年も半分終ったのかと思う。

その昔宮廷では、半年の間に積もった罪穢れをはい清める大祓の行事を、六月末と一二月末に行っていた。夏の大祓は、季節がら疫病防除の願いをこめ、一般には水辺において「みそぎ」をすることが多かったようだ。みそぎはすなわち「身濯ぎ」だといわれる。

風そよぐならの小川の夕ぐれはみそぎぞ夏のしるしなりけりよく知られた、小倉百人一首所収の、季節感あふれる歌である。暦で見ると、旧暦の六月三十日は今年八月九日にあたるので、この日に重ねてみると一層爽快な感じがする。

私は長いあいだ「ならの小川」の在り所を知らずにいたが、先年京都の上賀茂神社を訪ねて、境内を流れる清流がそれだと知った。賀茂の河原が大衆的なみそぎの場であった当時、その上流にあたるこの幽邃の地でなされた社人たちのみそぎこそ、みそぎのきわめつけだったのだろう。

「輪ぬけさま」はこのみそぎはらいの変形で、流水のない神社の境内

において容易に大衆が参加できるようにと工夫されたものと思われる。大祓といえ、子供の頃氏神さまの社頭で聴いた「大祓の詞」を思い出す。「高天原に神づまります神ろぎ神ろみの命もちて……」というあざなである。ほとんどは意味不明ながら、子供心に可笑しく思ったのは、人びとが犯した罪、蒙った穢れの処



頭に振るう。これは我われの身につけている罪穢れを払い落とす仕ぐさにちがいない。たしかに当時は、庭掃除のあと塵芥を家の前の小川に掃きこみ、子猫が生まれると目の開かないうちに船入川へ、七夕の竹も翌朝には物部川へ流して知らぬ顔でよかった。しかし、人間の犯す罪を、塵芥や垢と同列に扱ってよいものか、そこにおかしさを感じたのだった。

理方法であった。すなわち、鋭い鎌で茂った木を根元から伐り倒すように罪や穢れを切除し、川に流し海へ運び、地底の国へ吹き飛ばし、そこに待ち受けるハヤサスラヒメという神が「持ちさすらい失」なつてついでに行方知れず、よつてめでたしめでたしという次第。祝詞が終ると太夫さんが大きな御幣をとって参詣人の

「大祓の詞」に代表される罪穢れの日本の処理方法には、それなりの長所もある。しかし、個人の責任を問う、良心を支えるのは逆方向である。フィジカルには結構なものだが、メタフィジカルの方にみそぎを乱用することは、許されないだろう。

(高知県立図書館非常勤職員)

第3回高知の映像コンテスト入選作品



高知を撮る 火の舞 (室戸市吉良川八幡宮祭) 谷 次郎

ブランド指向

風俗歳時記

若い人たちが話しているのをみてみると、感覚的なことばで処理している例が多いように思える。たとえば「かわいい」「かっこいい」「のってる、のってる」など、特定のよく使われる言葉があつて、それだていの場合に間に合わせてしまふ。

女子学生が、初老の教授をつかまえて「かわいい」といふ。学識があるとか、教え方がうまい先生のことである。昔だったら「偉い人」とか「尊敬する先生」といふところを、こつ言つてしまつのである。なんでも六十歳近い大先生が「かわいい」のだとみてはしまらない。

もうひとつ、若い人たちがよく使う「そうだけれども……、そうだけれども……、そうだけれども……」と、言葉を重ねていく言い方も、こつした「論理欠落言語表現」の類だろうか。ある雑誌を読んでいると、女の子

がボーイフレンドを紹介するのに、「〇〇銀行に勤めている人なの」とか、「××大学の学生なの」とか、あるいは「お家は、△△さんなの」といった紹介の仕方をするのが、大変奇異な感じを受けると、フランスからきた留学生が語っている話がついてきた。

フランスでは、「とてもやさしい人」とか、「絵を描くのが好きで、一緒に美術館に行った」とか、または「この前映画のことで意見が合わなくてけんかをした」とかいつて、紹介するそうだ。

両者を比較してみるとよく分かるのだが、日本では人柄とか、趣味とか、特技、あるいは考え方は全く無視である。本当はそうではなからうが、人間でもブランド商標と同じ見方をしているようで、いやだといふのである。

それだけでなく軽薄になっている最近の人間観を、問われているように考えてしまった。(監)

楽しく、寅彦の世界を……
窪田善太郎

高知新聞の伝言板(仲間はどうぞ)の、「寅彦会では、左のように読書会をやっています。あなたも御一緒に、楽しく本を読んでみませんか。初めての方でも結構です。無料・輪読会」という呼びかけで、寺田寅彦記念館にて毎月第一日曜日午後二〜四時まで行っています。数年前、私は寺田寅彦記念館に勤めておりました。そして、この静かな環境の中で、寅彦の名作を読んでみたいと思いたちました。

最初は、生誕百年記念『寺田寅彦郷土随筆集』から始めました。この随筆集は、読みやすく、高知、特にこの家に関連する記事が多いので、興味深いものがありました。

中でも「庭の追憶」は、この広縁のここに若き日の寅彦が坐り、十五歳の幼な



食は生命なり
山岡 利江

「高知土と生命を守る会」は、自然のサイクルに従い健康的で味も良い、有機無農薬農法を採る生産者と、安全な食物を探し求める消費者とによって、一九七七年につくられました。

発足当時は貴重品だった無農薬の農産物も今ではあちこちで購入できだし、食の安全性に対する人々の関心も高まってきました。

食品添加物も見直され私達の食環境は良くな

つていきそうなのに、癌やアレルギーで苦しむ人々が増え続けているのは何故

でしょう。私達の会では自然を守り生命を守るにはどうすれば良いか、又見せかけの豊かさではなく本当の豊かさとは何かを、食を通して学び合ってきました。

健康で安全な食物作りも、小さな田畑を無農薬で頑張ってもなかなか難しい。家庭や工場の排水で農業の用水が汚染され、大気汚染で酸性雨になり原発事故でも起こるものなら、無農薬どころではなくなってしまう。



生き甲斐づくりの点訳奉仕
仲井 寛

ブルーの会とは点字を考案したフランス人の名前ですが、現在は点字を意味する名詞として使われています。

私は高知点字図書館の点訳ボランティアで、現在八七名の会員で組織されています。隔月に例会を開き、また機関紙を発行してお互いに連帯感を持ち、根気のいる点訳奉仕を励ましあっています。

今回、多年の懸案であった点字図書館の拡張工事も完成し、また点字用パソコン機器の導入により、従来より格段とその機能アップが図られました。点訳はカタカナで一字一字書くのと同じなので、一冊の本を仕上げるのに長い時間がかかり、更に誤字脱字があるとその訂正が苦労ですが、これが大幅に改善されました。

点訳は高齢者の老化防止にも大きく役立ちます。先ず正しく点訳できたかどうか



楽しいつどい
坂本 安

高知市には、中央公民館が開設する成人学級や婦人学級がたくさんあり、そのうち、広域婦人学級と呼ばれるものが八学級あります。小高坂広域婦人学級もその一つです。発足は昭和四十七年です

で、今年で二十年になります。小高坂地区在住の婦人が対象ですが、大体PTAも卒業した家庭婦人や長年勤務した職場を退いた人が

多いので、平均年齢は次第に高くなっていきます。家庭に引きこもり世事に疎くなつてはいけなないので、世界状況、経済問題、消費者問題、身近な法律、健康の問題なども学び、また政治のことも正しい眼で判断できるようにと、各方面の講師をお招きし、年間十二〜十三回の学習日を持ち、その他、郷土の史跡探訪や市内の施設の見学、料理実習や手芸、遠足や新年会なども加えてあります。

学習の計画は年度末に全員によるアン



妻夏子さんが並んでいたが……などと思いはせながら読んでいくと、誠に興味津々たるものがありました。

その後、「この読書から受ける感動を、より多くの人々に体験してもらいたい、この読書の喜びを多くの同好の人々にも味わってもらいたい。」という動機で呼びかけを行い、会は誕生しました。

目下、岩波文庫寺田寅彦随筆集巻(3)を終了し、(4)へと入るところです。御一緒にやってみませんか。連絡先 高知市小津町一五〇六 電話 〇八八八―二三―二八八七

私達の大切な生命を養う農業。米が自由化され主食まで自給しなくなつて、本当に飢える事にならないでしょうか。子供達の明日を守るために、自然を大切に日本の農業を継承して行けるよう、農家と消費者が手を結んで支え合つて行きたいと思ひます。

「食は生命なり」、あなたも会員になられて、「食」を通して学び合ってくださいませんか。連絡先 高知市神田二二八七―六 高知土と生命を守る会 電話 〇八八八―三三―一七五二

か確認のため、二度三度と見返しをすることが大切ですが、そのため知らず知らず今までの読書では見逃していた文章の深みに触れることができます。また指先を使う作業ですので、正にほけ防止に打って付けです。点訳は自分の都合に合わせて自宅で好きなときに好きな時間でできるボランティア活動です。特に定年退職後の第二の生き甲斐として点訳に取り組んでみませんか。

連絡先 高知市本町五丁目一番三十号 高知点字図書館内 高知ブルーの会 電話 〇八八八―七二―二五〇一

ケートで決めます。講師の先生もできるだけみんなの要望に沿うようつとめております。長い間人気を集められた世界勢の津田幸雄先生、史跡めぐりの橋詰延寿先生はともに亡くなられて大へん残念ですが、またそれぞれの専門の講師をお迎えして続けております。学級運営は、何事も話し合いで民主的に決めること、誰もが何か一役持つこと、そして何よりも仲よしであることをモットーとしています。

連絡先 高知市城北町三一―四 電話 〇八八八―七五―二〇〇九



鏡川朝倉堰で分水された流れは、朝倉の平地を突っ切つて一路南下、鶴来集で東に大きく蛇行し神田川に注ぎ込む。かつて、この用水溝の水は灌漑用としてのみならず飲み水として人々の生活を支えてきた。そして、朝倉神社の鎮座する赤鬼山の北東に僅かに残る三機の水車は今も水田に水を送り続けている。

風伯

地方史の水準

むろん「高知県の歴史」(山本大著)も含まれている。

両書を読んだ寸感には、(さすが、高知県の地方史研究はすぐれている。)であった。社会の変遷、興亡のあらましを取捨選択して、(歴史的事象)を解析する史眼が、『新潟県の歴史』には、行き届いてない恨みがある。

(非礼をかえりみずいへば……) その点、『高知県の歴史』は山本大氏の史眼が冴え返つて、非のうちどころがない。それを説明すると、とても六〇〇字内におさまらないから、ぜひ両書を精読して、とくと吟味されたい。ならば、本県の地方史研究がいかに精緻をきわめて(歴史的現実)を検証しているかがわかるとおもふ。

今や本県の地方史研究は、他県のそれを凌駕する、といつても過言ではないだろう。そのゆえんは、先学、平尾道雄、横川末吉、山本大諸先生をはじめ、多士済々の史家の方たちが、つねに真摯、謙虚な態度で、辛苦研鑽につとめて、(歴史の森)を蹤跡したた

まものである。ねがわくば、先達の文化的遺産を継承して、(高知県地方史研究)を、更にさらに発展させていただくことを切に望む。

文化セミナー'91 〈後期〉

「現代日本を読む」

◇10月18日(金)午後6時30分～午後8時30分◇会場：高知共済会館 3階ホール

◇演題：『田園リゾートの模索—地域主導の農村・都市交流—』

◇講師：佐藤 誠氏 (熊本大学教育学部教授)

◇10月25日(金)午後6時30分～午後8時30分◇会場：高知共済会館 3階ホール

◇演題：『日本人の国際感覚』

◇講師：鳥羽欽一郎氏 (早稲田大学商学部教授)

◇11月16日(土)午後1時30分～午後3時30分◇会場：オリエントホテル高知2階松竹の間

◇演題：『巨大都市の精神構造』

◇講師：野田正彰氏 (京都造形芸術大学教授)

*参加費 各回 500円 *定員 申込先着 100名

*会場がそれぞれ異なっていますのでご注意ください。

*お問い合わせ、お申し込みは、文化振興事業団まで。

元吉恵子先生とともに
オペラと合唱を
楽しもう'91

講師 師 元吉恵子先生

(作陽音楽大学助教授)

ピアノ伴奏 吉岡勢津子氏

(フラーワソングクラブ常任伴奏者)

今秋上演される「オペラよさこい

節」にご出演される元吉恵子先生を

講師に迎え、先生の歌をたつぷり聴

いたあとに、本場のベルカント唱法

で思いつきり歌ってみませんか。ど

なたでもお気軽にご参加ください。

〈プログラム〉

■第一部 元吉恵子先生ミニコンサート

ゆく春

城ガ島の雨

風の子供

たあんきばーんき

この道

私はいやしい召使い

哀れな花

■第二部 皆で歌おう、日本の歌(歌唱指導)

浜辺の歌

夏の思い出

〈日時〉9月14日(土)午後2時～4時

〈会場〉高知電気ビル8階ホール

〈定員〉20名 高知市本町4-1-16

〈参加費〉大人 1,000円

小中高生500円

〈問い合わせ・申し込み先〉

高知市文化振興事業団

高知市立保育園園長会編
ほのぼの子育て
定価一、〇〇〇円

岡林清水著
高知県文学散歩
四六判二七八頁
定価一、八〇〇円

高知の文化を考える会編
高知の文化を考える
A5判一八八頁
定価一、二〇〇円

高知市文化振興事業団編
わがまち百景
A5変二三四頁
定価一、二〇〇円

高知県緑の環境会議森林研究会編
高知の森林
B5変二三八頁
定価一、五〇〇円

筒井広道著
画帳の歳月
A5変二五六頁
定価二、〇〇〇円

上森千秋著
流れと波の科学
A5判二四〇頁
定価一、五〇〇円

土居重俊著
土佐日記
A5判一一八頁
定価一、八〇〇円

土居重俊・浜田数義編
高知県方言辞典
A5判七三六頁
定価六、〇〇〇円

高木啓夫著
土佐の芸能
B5変三四六頁
定価四、八〇〇円

清水孝之著
中山高陽
A5判三三六頁
定価三、八〇〇円

外崎光広編
土佐自由民権資料集
A5判三四四頁
定価三、〇〇〇円

大谷英二著(高知レポート1)
明日を創る
A5判一二六頁
定価一、〇〇〇円

今井嘉彦著(高知レポート2)
河川はよみがえる都市の
土佐の自由民権運動
A5判一〇八頁
定価一、〇〇〇円

*は税抜き価格です

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町5丁目2番3号

TEL(0888) 73-4365
郵便振替 徳島 8-14869